

## 第27期 日本語・日本文化研修コース [上級日本語特別コース]

(2007年10月～2008年9月)

初 山 洋 介

第27期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、10カ国、22名（中国：5名 [内1名：香港]、インド：4名、インドネシア：3名、韓国：3名、ベトナム：2名、イラン：1名、スウェーデン：1名、スロバキア：1名、タイ：1名、ロシア：1名）であり、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

### (1) 教科書による日本語学習 (10月～4月)

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「読解シート」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

### (2) 応用会話 (10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

### (3) 入門講義・特殊講義 (10月～7月)

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得する

ことを狙いとして、10月～1月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×5回）を行った。

### (4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

### (5) 発展読解 (10月～4月)

発展読解として、新聞などの生教材の読解、本の読解（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）、特別読解（学生が自分で読解の素材を用意し、学生主体で行う授業）などを行った。

### (6) スピーチ (10月～7月)

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

### (7) レポート (1月～7月)

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとで

レポートを作成した。分量はA4、15～30枚程度である。研究成果は『2007～2008年度日本語・日本文化研修生 レポート集』（484ページ）として発行した。また、中間発表会（5月、発表：20分／質疑応答：10分）、最終発表会（7月、発表：20分／質疑応答：3分）を実施した。研究レポートの題目は以下の通りである。

1. 李賢珠(韓国)「韓国の大学における日本語のアクセント教育」
2. 葉詠嘉(香港)「日中神話の比較研究—相違点を中心に—」
3. カンカンウォン(韓国)「近代における「知識人」についての考察：夏目漱石『それから』を中心に」
4. 魏婷婷(中国)「女性語と若者—女性による使用と男性からの期待—」
5. 金アロン(韓国)「韓国人からみた日本の城」
6. ギラン ユディスティラ スルヤディムリア(インドネシア)「学校におけるいじめ—エスカレートさせる要因—」
7. グエン ビック ゴック(ベトナム)「MDGsにおける援助の有効性」
8. ゲン・ティ・ハン・ナガ(ベトナム)「日本型ODA—現状と展望—」
9. 呉蓉蓉(中国)『吾輩は猫である』の読み方：寒月を筋として」
10. サラ・ジャラリ(イラン)「日本人の対人関係における接触行動—握手を中心に—」
11. サンタ・エウフェミア・マヌエル(スウェーデン)「日本におけるラップ—歌詞の特徴を中心に—」
12. チャイタンニヤ・ディクシート(インド)「『愛』に関する比喩表現」
13. ナザリア・クルニア・デウイ(インドネシア)「女人禁制—女性差別か「伝統」か—」
14. ファルダ・ズライダー(インドネシア)「十二支のことわざ」
15. プション・シャンティ(インド)「『坊っちゃん』、漱石、そして松山」
16. ブルツェワ・マリナ(ロシア)「ロシアのエネルギー戦略と日露関係」
17. 彭旭(中国)「日本と中国の漢字改革—日中漢字の関連性—」
18. ポーティスイッティポン・ティッパーヤーラット(タイ)「『してください』の「ふくみ」」

19. ミハル・コジャ(スロバキア)「江戸・明治期の日本における洋食の受容」
20. ラケラ・シルティ(インド)「日本国憲法第九条改正議論：九条は改正すべきか」
21. ラナ・セン(インド)「日本語の諺の特徴：ベンガル語と比較して」
22. 劉鳴(中国)「日本のホラー映画の分析」

#### (8) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞や雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは「食」について考える」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～2週間である。

#### (9) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

これまで行ってきた定期的な漢字テストに加えて、今期から新たに「漢字コンクール」（年4回）を実施した。これは、漢字学習をさらに活性化することを狙いとしたものである。

#### (10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会(ディベート)、ことばのクラス(ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム)なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通じた日本理解」にも参加した。

#### (11) アンケート

2008年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
	0	1	2	3
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	0人	9人	13人

#### (12) 今後に向けて

今期のコースを通して、いくつかの教材に関して見

直し・修正の必要があることが改めて明らかになった。特に、これまで読解教材の一つとして『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』の「読む練習」の一部を用いてきたが、素材として古くなったと

思われるものがある。したがって、上記に代わる精読教材を早急に用意する必要がある。来期に向けて、内容、表現、文体などの観点から中・上級読解教材として適切なものを選定していきたい。